

1. 「可算名詞(数えられる名詞)」と「不可算名詞(数えられない名詞)」の区別。

ある名詞が「数えられる(=可算名詞)」か「数えられない(=不可算名詞)」かの最も単純な見極め方は以下の通りです。

- ① 「数えられる名詞」…(その名詞)を聞いてイメージ(形・まとまり)が具体的に浮かぶもの。つまり絵に描けるもの。
- ② 「数えられない名詞」…(その名詞)を聞いてイメージ(形・まとまり)が漠然として(抽象的で)具体的に浮かばないもの。つまり絵に描けないもの。

具体例を挙げて説明してみましょう。

「furniture(家具)を描け」と言われて、すぐにイメージがわくでしょうか。家具といっても、タンスもあれば、鏡台もあります。一瞬何を描けばいいのかわからないはずですが、このようなものは「数えられない名詞」になるのです。baggage(荷物)やscenery(風景)にしてもそうですね。漠然とし過ぎて具体的なイメージがわきません(「荷物」といっても、ポーチからボストンバッグまでいろいろあり得る)。これらも「数えられない名詞」です。しかし、たとえば life(人生・暮らし)は、数えられない名詞なのに、happy life というと数えられる名詞になります。これはなぜなのでしょう。

- ① life(人生・暮らし) [不可算名詞]
- ② a happy life(幸せな人生・暮らし) [可算名詞]

それは、「人生・暮らしについて書け」と言われても、テーマが大き過ぎてすぐには何を書いたらいいのかわかってしまいますね。つまり具体的なイメージがわきません。だから life(人生・暮らし)は「数えられない名詞(不可算名詞)」ということになるのです。しかし「自分にとっての幸せな人生・暮らしについて書きなさい」と言われれば、先程よりは書きやすいのではないのでしょうか。つまり「イメージがわきやすい」わけで、この場合、「数えられる名詞(可算名詞)」となって②のように a がつくのです。別の言い方をすれば、「形容詞をつけることによって全体(大きな枠)の中の一つの種類を強調する → 個別的なイメージがわく → 可算名詞化する」わけです。

更にこんな例をあげてみましょう。coffee など、液体状のものは「数えられ

ない名詞」と学校で習ったかもしれませんが、喫茶店などでの会話ではこんな表現が成り立ちます。

I ordered three coffees.

coffee そのものは具体的なまとまりに欠けるので数えられません。ところが喫茶店で出されるようなコーヒーは、カップの中に入っていてまとまっているように感じられます(多くの人が共通してその「絵(イメージ)」を頭に描ける)。その結果、1杯2杯と数えられるようになってくるといわけなのです。このように「数えられる」か「数えられない」かは"具体的なまとまり(形)"という感覚が感じられるかどうかで決まってくるということを覚えておいてください。

更にもう1つこんな例を挙げてみましょう。「私はサラダにリンゴを入れた」という場合、どちらの英文が正しいでしょうか。

- ① I put an apple in the salad.
- ② I put apple in the salad.

①では an apple と、可算名詞として apple を使っています。ということは、まとまった具体性(頭の中で絵に描ける)をもっていることになるので「リンゴまるごと(そのままの形で)1個」をサラダに入れたということになってしまい不自然。逆に、②の方は、無冠詞で apple を用い、不可算名詞として扱っています。ということは、まとまった形を念頭に置いていないこととなります。サラダに入れるリンゴは細切れになっており、確かに元の「形」はイメージできませんね。したがって②の方が正しいのです。

ついでにもう1つ。kindness には「可算名詞」と「不可算名詞」の両方の意味があります。不可算名詞の場合、「親切、優しさ」という意味。確かにこれは具体的なイメージ(形)が浮かびません。つまり絵に描けません。

(ex) He did it all out of kindness.

彼はそれをすべて親切心からやったのだ

Treat everybody with kindness.

だれにでも優しく接しなさい

kindness が可算名詞となる場合、「親切な行為」という意味になります。こちらは逆に具体性があり、イメージが浮かびます(電車の中でおばあさんに席

を譲ってあげるとか…。

(ex) I received many **kindnesses** from him.

彼からいろいろ親切にしてもらった

Will you do[show] me a **kindness**?

お願いがあるのですが

可算名詞、不可算名詞両方の用法があるのは life, kindness, apple だけではありません。多くの名詞には両方の用法があるのです。

ではある名詞を(「可算名詞」「不可算名詞」に)使い分ける基準は何かというとそれは、要するに話し手(書き手)がその名詞を語る(書く)際に、その具体的なイメージ(形、まとめり)を頭に描いて語るならそれは可算名詞になるものであり、そうでなければ不可算名詞になるのです。

では理解を定着させるために、もう少しいくつか例を挙げてみましょう。

- ① You can have some more **cake**.
- ② You can have some more **cakes**.

①は cake を不可算名詞として使っています。これはパースディケーキのような大きなケーキの中から一部分を切り取って食べる場合です。このような場合、その切り方は決まっているわけではないので、その「形」を念頭に置いていないのです。

②はケーキ屋さんのウィンドウの中の「ショートケーキ」「モンブラン」のように、初めから一定の大きさに切られて並んでいるもののこと。したがってこういった場合は可算名詞となり、複数の s が付いているわけです。

- ① You have **egg** on your tie.
- ② You have **an egg** on your tie.

上の英文で、②のように言ってしまうと、丸い卵一個をネクタイにくっつけていることになってしまう(先程の I put an apple in the salad. と同じ)。したがって②はおかしな表現と言えます(①が正解)。

- ① A **big oak tree** used to stand in our yard.
うちの裏庭には大きな樫の木が立っていた

② The room was furnished with expensive cabinets of **oak**.

その部屋は高価な櫛の(木でできた)戸棚が備えつけられていた

上の英文はどちらも正しい英文です。①の oak は a がついて可算名詞として使われています。その理由は一本の「形」のある樹木として oak をとらえているからです。

②の oak が無冠詞で使われ不可算名詞となっているのは、家具の材料として(つまり「形」を念頭に置かずに)用いられているからです。

① They were throwing **stones** at the police.

彼らは石を警察めがけて投げつけていた

② They cut huge blocks of **stone** out of the mountain.

彼らはその山から巨大な石を切り出した

①は道に落ちている一つ一つの石のことを指しています(拾って投げるような「石ころ」といえば、誰しものがイメージを共有する一般的な「形」あるもの。故に可算名詞としてここでは stone が扱われている)。②は「材料」としての石です(「材料」としての石に、誰もがイメージのわく決まった「形」があるわけではないので、不可算名詞として扱われている)。

① There had been **heavy snow** in this area last night.

② A **heavy snow** set in.

①では自然現象としての雪を量的にとらえています(snow は不可算名詞)。

②では今降ってきた大雪を個別的に、一回限りの現象としてとらえています。(snow は可算名詞)。

① He has not had much **difficulty**[**experience**].

② He has not had many **difficulties**[**experiences**].

①では、概念としての「困難」「経験」を表しています(それぞれ不可算名詞)。②では彼がこれまでに会った個々(具体的な)の「困難」「経験」を指しています(それぞれ可算名詞)。

① I put him to **silence**. 私は彼を(議論でやり込めて)黙らせた

② There was a **short silence** between them.

彼らの間にしばらく沈黙があった

①の silence は「(一般的な)黙りこくった沈黙状態」。②の silenceは、その時訪れた「(短い)沈黙」という意味です。

① It is important to distinguish fact from fiction.

事実と虚構を区別することが大切だ

② It is a fact that he won the race. 彼がレースに勝ったのは事実だ

①は抽象的な概念としての「事実」という意味で使われています。②は、「具体的な一つの事実」という意味です。

このとらえ方は他にもあてはまります。たとえば war と言えば「抽象的な概念としての戦争」であり、a war と言えば「具体的な(個別の)一つの戦争」という意味になります。a law と言えば「ある条文からなる具体的な一つの法律」であり、law と言えば「抽象的な概念としての法律」ということになります。

ただどちらでも大して意味が変わらないというものもあります。

(ex) The child showed (an) interest in music.

その子供は音楽に興味を示した

ただし an interest の方が、具体的な興味を持った(その子供の)イメージが念頭に置かれた表現となります。

2. 「形容詞＋抽象名詞(物質名詞)」。

抽象名詞(物質名詞)に形容詞がつくと具体的な例や種類を表し、a[an] がつく(まり可算名詞化する)ことが多いんですね。

(ex) She had a happy marriage. 彼女は幸せな結婚生活を送った

上の英文の場合、marriage は本来不可算名詞なのに、happy という形容詞がつくことによって可算名詞化し、冠詞の a がついています。

このように形容詞がつくと抽象名詞(不可算名詞)が普通名詞(可算名詞)化する理についてはここまでで説明しましたね。

(ex) They serve good lunches here. ここはうまい昼めしを食わせるよ

ただ、形容詞がついても原則として a[an] のつかない抽象名詞もあります。

× He is making a steady progress in speaking English.

○ He is making steady progress in speaking English.

彼は英語を話すのが着実に進歩している

上の例のように、progress は形容詞が前に付こうが付くまいが不可算名詞です。以下にそのような抽象名詞の具体例を挙げてました。これも太字の名詞は頻出です。

(ex) advice 「忠告」	applause「拍手喝采」	behavior 「行為」
conduct 「態度」	damage 「損害」	fun 「楽しみ」
harm 「害」	homework「宿題」	information「情報」
luck 「運命」	music 「音楽」	news 「知らせ」
nonsense「無意味なこと」	progress「進歩」	weather 「天気」
wisdom 「知恵」	work 「仕事」	traffic 「交通」

また、形容詞などが前につかなくても抽象名詞なら「そのような性質を持った人(物)」「具体的な種類や行動(の結果)」等を表す場合、物質名詞でも「具体的類や製品」等を表す場合、つまりその具体的なイメージ(形、まとまり)を頭に描ことができる場合には可算名詞として用いることができます。

① His new car is a beauty. 彼の新車はすばらしい

② I cannot understand his sense of beauty.

彼の美的感覚を理解できない

☞ beautyを「美しい人(物)」という場合、①のように数えられる。「美」「美しさ」という抽象的概念として用いる場合には、②のように数えられない(無冠詞になる)。

① Patience is a virtue. 忍耐は美德である

② He explained the virtues of his own car.

彼は自分の車の長所を説明した

☞抽象的な概念としての「美德」という意味ではvirtueは数えられない(無冠詞になる)が、上例の①や②のように、「個々の美德」「長所」といった場合には数えられる。

① This is one of **his achievements** as a scientist

これは科学者としての彼の業績のうちの1つだ

② I was swimming in a sense of **achievement**.

私は達成感にひたっていた

罫①のように「(達成された行為・結果としての個々の)業績」という場合には、achievementは数えられる。しかし②のように抽象的概念としての「達成」「成就」という場合には数えられない(無冠詞になる)。

① Turn off **the lights**. 電灯を全部消しなさい

② The sun gives us **light**. 太陽は我々に光を与える

罫①のようにlightを「灯」「電灯」という意味で用いる場合には数えられる。②のようにlightを「光」「明るさ」という意味で抽象的に用いる場合には数えられない(無冠詞になる)。

① He tripped over **a stone**. 彼は石につまずいた

② This tool is made out of **stone**. この道具は石でできている

罫①のようにstoneを「一つの石」と意味で用いる場合には数えられる。②のようにstoneを「(素材としての)石」という意味で用いる場合には数えられない(無冠詞になる)。

3. 「There is[was]+名詞」構文と冠詞。

「There is[was]+名詞」構文では、名詞には基本的に a が付きます。文頭の There は、それ自身には意味はありません。次に現れる主語を導く「導入の there」と呼ばれるものです。したがってその後にくる主語は「新情報」となるのが自然なのです。故に「a+名詞」が基本なのです。

(ex) There is a book on the desk. 机の上に本が1冊あります

罫A book is on the desk. とは言わない。

これを There is the book on the desk. とあえて言うと、the が付いた名詞は旧情報なので(17ページを参照せよ。)本があるということが(話し手・聞き手双方にとって)前提の知識となり、その「本」がどこにあるのかを言わんとする文となります。たとえば本とノートを探していて、そのうち本の方は机の上に見つかった(ノートはまだ見つからないけど)というような場合に述べるような表現となります。

単に「本は机の上にあります」というような場合は

The book is on the desk.

と言います。

4.a と the の違い。

(1) a の付いた名詞の特徴。

a のついた名詞というのは、それが(会話・文章などで)登場した時点では、その中身は話し手(書き手)は分かっているが、聞き手(読み手)の方はまだわからないものです(つまり両方で認識を共有していない)という特徴があります。

(ex) I saw a handsome boy yesterday. 昨日ハンサムな男の子を見たの

と話し手が言った場合、話し手の方にはその男の子の具体的なルックス、ファッション、雰囲気についての情報は(自分が言い出したのですから)分かっていますが、聞き手の方にはこの時点では一切わかりません。したがって聞き手の方は、a ついた名詞が現れると、「さてそれが具体的にどんな人・物なのだろう」といろんなイメージを頭の中で沸かせることになります。

このように、冠詞の a には、「相手に興味を抱かせ、連想させる」「相手にイメージさせる」働きがあると言える。

ということは、言い方を変えれば a がつくということは、その名詞は「(頭の中で)イメージできる」ということにもなります(これを文法用語では可算名詞といい、「イメージできない」名詞を不可算名詞という)。

(2) the の付いた名詞の特徴。

the のイメージを一言で表せば「自動的に1つに決まる」ということです。つまり the をつけることによって、その名詞についての認識を話し手(書き手)と聞き手(読み手)双方が持っている(両者が認識を共有している)ということを示すことになるのです。要するに「相手も了解済み」とであると判断できる場合に、その名詞に the をつけるのです。日本語に強いて訳すとすれば「例の

～」に近いと言えるでしょう。この点は、話し手(書き手)しか具体的な中身を認識していない a とは対照的と言えます。

太陽、地球、月 はそれぞれ the sun, the earth, the moon と the が付きませんが、これは我々が共通認識として持っている「太陽」「地球」「月」は「一つに決まっている」からです。

(3)初めて登場した名詞でも the が付くことがある。

今説明した通り、the のもつイメージは「(文脈上から、あるいは状況から)自動的に1つに決まる」ということです。したがって「初めて出てきた名詞」でも、文脈上(状況)から自動的に1つに決まってしまう場合には、the が付くことがあるのです。

① It's a little too hot. Will you open the window?

ちょっと暑いな。窓を開けてくれますか

この例文で、window の冠詞が the になっているのは、

- 1.部屋の中には窓がそれ1つしかない
- 2.の部屋の中で閉まっている窓はそれ1つだけ

といったような理由で、「その場の状況から自動的に1つに決まる」からです。

② The train came out of a long tunnel into a land of snow

トンネルを抜けるとそこは雪国だった

これは川端康成の有名な小説「雪国」の冒頭の一節です。

the という冠詞は、「自動的に1つに決まる」ということは、裏返せば「それ以外(聞き手に)連想させない」ということもできます。

尙逆に a は、相手に「どんな人・物なのだろう」と連想させる働きがあった。

要するに、誰が連想しても「自動的に1つに決まる」のですから、聞き手は余計な頭を働かせる必要がないということにもなります。聞き手も最初からその存在を知っている、つまりその存在を認めることになるので、the は「その存在を前提に話をする」ときにも使われるのです。②の英文で train に the が付いている理由は、話し手の方が、列車の存在を前提にして話を進めようとし

ているからだと言えます。"A train(ある列車)"と書いてしまうと、読み手の方が、「どんな列車?」と連想をしてしまいかねないのです。そこで読者の気を列車の方に(とりあえずこの段階では)引かせたくないから(つまり連想させたくないから)、aではなく、あえて the を使ったと言えます。このような the の使い方は小説や物語独特なもので、更に言えば、「the train についてはこの後の展開の中できっと詳しく説明し、いろんなことがわかっていくことになりまますから」ということを、筆者は暗に読者に伝えていることにもなるわけです。

(4) 「a」……「いくつかあるうちの1つの～」
「the」…「唯一の～」

この考え方が身につくと、以下の英文の違いも簡単に理解できるでしょう。

① This is a picture I painted last night.

② This is the picture I painted last night.

①と②の違いを明確にして訳すとすれば次のようになるでしょう。

①「私が昨晚描いた絵は何枚かあって、これもそのうちの1枚です」

②「私が昨晚描いた絵はたった1枚で、これがまさにその絵です」

③ I am () student at Hiroshima University. 僕は広大の学生です

④ Someone stole () bicycle I left in front of the station.

駅前に置いてあった自転車を盗まれた

③と④の空欄にはそれぞれ a と the のどちらが入るかわかりますか。

答えは③に a、④に the が入ります。③に the を入れてしまうと、「私は(この世で)唯一の広大の学生だ」という意味になってしまいます。また④に a を入れてしまうと、「私は駅前に何台か自転車を置いてあって、そのうちの1台が何者かによって盗まれてしまった」という意味になってしまい、常識的に不自然です。

もう一つ、こんな例を挙げましょう。「ウソをつく」と言う場合 tell a lie と言いますが、「真実を言う」という場合 tell the truth と言います。

これは嘘はいくらでもあり得ます(言い方を変えれば一つに特定できない)。しかし真実はたった一つしかないからです。

尙「真実性」「真実味」という意味で truth が使われる場合は、無冠詞になることもある。

(ex) There is some truth in what she says.

彼女の言うことには何かしらの真実味がある

また「立証された一つの真理(原理・事実)」という場合には a truth となる。

(ex) Einstein discovered an important truth.

アインシュタインは重大な原理を発見した

(5)可算名詞に「the」をつけると「抽象名詞」化する場合がある。

① The pen is mightier than the sword.

ペンは剣よりも強い → 文(言論)は武(武力)より強し

①の the pen は具体的なペンではなく、ペンが象徴する抽象的な「言論」という意味です。一方、the sword も具体的な剣ではなく、剣が象徴する「武力」の意味です。このように「the+名詞」は「(名詞)と聞いて誰もが思い浮かべる一番有名なもの」を象徴的に表す働きがあります。

② He is under the knife.

②の英文中の knife とは、医者が使う「メス」のことです。the knife は「メスと聞いて思い浮かべるもの」すなわち「外科手術」のことです。つまり②の意味は「彼は手術中である」という意味です。

(6)不可算名詞に「the」をつけると「特定のもの」を表す。

① I like music.

② I like the music.

①のように「不可算名詞」を無冠詞で使えば「総称」を表すことになります。つまり①は、「私は一般に音楽というものが好きだ」ということになります。②のように「不可算名詞」に the をつけると「特定のもの」を表すことにな

ります。したがって②は、「私は(例の)その音楽が気に入っている」という意味になります。

③ How is the weather there?

④ The weather was rather bad yesterday.

本来 weather は「不可算名詞」なのですが、③や④のように the をつけることによって、「特定の地域の天気」を表すことになり、したがって③は「そちらの天気はいかがですか」、④は「昨日は(ここ・その)天気はあまりよくなかった」という意味になります。

尙逆に「天候」というものを自然界一つの要素として抽象的にとらえるならば無冠詞になる。

(ex) In clear weather we can see the mountains.

晴れた日には山々が見える

5. 「that+名詞」。

(ex) Do you know that man over there?

あそこにいるほら、あの人を知っていますか

名詞に that が付く場合というのは、その「人・物」が目の前にいて、それを指さしながら「ほら、あの人」「ほらあれだよ」というような場合です。もちろん実際に指を差さなくても、そのような気持ちを込めて

What's that sound? あの音は何だろう

等と言うこともあります。

あるいは the とほぼ同じですが、より強調したいような場合に that が使われることがあります。

(ex) It's that father of his, of course. もちろん彼のあの父親だ

She's done it, that fool of a Kim.

あのキムのバカ。そんな事をしでかしたのか

あるいはもっと単純に this+名詞 に対する that+名詞 として使われることもあります。当然ながら this+名詞 に対して that+名詞は、物理的・心理的に

話者から距離を感じている場合に用いられます。

(ex) This room is hers and that one is mine.

この部屋は彼女の部屋であれば私の部屋です

6. 総称用法。

冠詞や形容詞や限定詞(this, that, some, any, 所有格等)も何もつかない裸の名詞の複数形は「総称」、つまり「一般的に〇〇というもの」を表します。

(ex) Boys will be boys. やはり男の子は男の子だ

→ いたずらするのは仕方がない

上の英文はことわざですが、boys は「一般的に男の子というもの」という意味で用いられています。

「ボクはリンゴ[ネコ]が好きだ」という場合、I like apples[cats]. と言います。これも総称用法です。これを an apple[a cat] としてしまうと、「ボクはとある一つのリンゴ[一匹のネコ]が好きだ」ということになってしまい、「え?どんなリンゴ[ネコ]」と、相手に変な連想をさせることになってしまいます。

「a+名詞」や「the+名詞」にも「総称」用法がありますが、「裸の名詞の複数形」で「総称」を表すのが、最も一般的です。

とはいえ「a+名詞」や「the+名詞」それぞれが「総称」を表す場合のニュアンスの違いもあるわけで、少々細くなるがそれをまとめてみましょう。

① 「a+名詞」の総称用法。

(ex) A Lion is a large animal. ライオンは大きな動物です

「総称用法」があるといっても a の持つ基本的意味は同じで、要するに「相手にイメージさせる」働きです。したがって、上の例文は「ライオンを想像してみてください。ほら大きな動物なんだよ」と、どちらかという子供に向かって言っているような感じになります。

あるいは自分の問題と直接絡んでいるようなときは「総称の a」を用いることがあります。

(ex) A cat is smaller than a dog, so let's get a cat.

ネコのほうがイヌより小さいから、ネコにしましょうよ

この例文はペットとして飼おうとするときの状況です。cats や dog を使うと、「総称用法」と言えども、複数形は複数の意味が残るので、複数飼うような感じがしてしまいます。1匹だけ飼うことを想定しているのなら、a がふさわしいと言えるでしょう。

②「the+名詞」の総称用法。

the の総称用法は、a とは逆に

- 1.学問的な雰囲気
- 2.重厚な物々しさや格調高さ

を漂わせることになります。例えば

(ex) **The lion** is a member of the cat family.

ライオンはネコ科の動物である

上の例文は、ライオンを動物学的に分類している際の話となります。

下の例文の the は重厚な物々しさや格調高さを出しています。

(ex) **The lion** is the king of beasts. ライオンは百獣の王である

なぜそのようになるかと言えば、「可算名詞に the をつけるとその名詞を抽象化してしまう」働きがあるからです。the lion は「ライオンという概念」という堅い感じになります。したがって、普段の会話でまず「the の総称用法」は使われないと思っていいでしょう。

【冠詞についての補足～受験で狙われやすい点を中心に】

1.不定冠詞(a[an])の特殊な用法。

不定冠詞と呼ばれる a[an] は、可算名詞の単数形を文中にはじめて登場させる場合に、また「(複数あるうちの)ひとつの～」という意味で用いられるのが基本だが、それ以外にも様々な(特殊な)意味がある。

(1)「ある～」 =a certain

(ex) It is true in a sense.

それはある意味で真実だ

He came back on a Christmas.

彼はある年のクリスマスに帰ってきた

(2)「いくらかの」 =some

(ex) She thought for a while.

彼女はしばらくの間考えた

(3)「同じ」 =one and the same

(ex) Birds of a feather flock together.

同じ羽毛の鳥は群れ集まる → 類は友を呼ぶ

(4)「～につき」 =per

(ex) We have five English classes a week.

英語の授業は週に5時間ある

罇a はふつうの口語調。per は改まった実務英語などに用いる。

(5)「どれでも」「～というもの」 =any

「～というものならどれでも」という意味で、不特定の1つを代表として取り上げ、その種類のものすべてについて特有の性質を述べる形。

このような総称を表すのは原則として主語になる場合である。

(ex) A house built of wood is more easily burnt than a house of stone.

木造の家は石造りの家より容易に燃える

(6) 「a[an]+固有名詞」

① 「～と(か)いう人」

(ex) A Smith spoke to me all night long at the party.

スミスとかいう人が、パーティーで一晩中私に話しかけてきた

② 「～のような人」

(ex) He is a Cicero in speech.

彼は弁舌にかけてはキケロのような雄弁家だ

會この場合、a[an]の後には、「有名な人物」または「話し手と聞き手の間ですでに共通にわかっている固有名詞」がくる。引き合いに出す人物によっては、人をけなす場合にも用いられる。

③ 「～家の人」

(ex) His wife is a Tokugawa.

彼の奥さんは徳川家の人だ

④ 「～の作品・製品」

(ex) He bought a Kodak and showed it to me.

彼はコダックのカメラを買って私に見せてくれた

會a をつけるか an をつけるかについての注意点。

①母音字で始まっても発音が子音の語には原則として a をつける。

a university a European a one-man show

②h で始まっていても h を発音しない語には an をつける。

an hour an heir(相続人) an honor(名誉となるもの)

③略語でも母音で始まるものには an をつけるのがふつう。

an MP(代議士) an SOS(遭難記号)

2.定冠詞(the)の特殊な用法。

the の持つイメージは、要するに「1つに決まる(限定・特定される)」ということ(それに対し「a+名詞」は「沢山ある中の1つ」というイメージ)。具体的には以下の3つの用法が最も一般的だ。

①前に出た名詞に付ける ☞前に一回述べているから「1つ(1人)に決まる」。

(ex) I met a boy yesterday. **The** boy was blind.

私は一人の少年に昨日会った。その少年は目が見えなかった

②前後の関係からそれとわかる名詞に付ける ☞つまりこれも「1つに決まる」。

(ex) Will you open **the** window? 窓を開けてくれませんか

③常識的に「唯一のもの」をさす名詞に付ける ☞これもまた「1つに決まる」。

(ex) **the** sun, **the** moon, **the** earth, **the** universe (宇宙), **the** sky 等。

上記以外にも、the には様々な(特殊な)用法がある。

(1)「~というもの」

「~というもの」という意味で、その種族全体をひとまとめにして表す。総称の the とも言う。a[an] にも同じような用法があるが、「the +名詞」の方がやや形式ばった学問的記述などに用いられる。

また、a[an] と違って、目的語の位置でも総称を表すことができる。

(ex) The horse is a useful animal. 馬は役に立つ動物だ
He plays the violin. 彼はバイオリンをひきます

(2) 「the+形容詞」

① 「～な人々」 ☞「the+形容詞」が「(人を表す)複数名詞」化することがある。

(ex) the rich (金持ち) the young (若者)
 =rich people =young people
the poor (貧乏人) the old (老人たち)
 =poor people =old people
The very wise avoid such temptations.
非常に賢明な人たちはそのような誘惑を避けるものだ

② 「～なもの、こと」 ☞「the+形容詞」が「抽象名詞」化、又「集合名詞」化することもある。

(ex) The most important is yet to be explained.
最も大切なことがまだ説明されていない
The task approaches the impossible.
その仕事は不可能に近い

結局、「the+形容詞(分詞)」には3つの意味があることになる。

たとえば the good は、

- ① 「善良な人々」 =good people ☞(人を表す)複数名詞化
- ② 「善」 =goodness ☞抽象名詞化
- ③ 「良いこと[物]」 =good things ☞集合名詞化

the old も同様に「老人たち」「古さ」「古い物」の3つの意味をもつことになる。文中でそのどれになるかは文脈判断となる。ただしすべての「the+形容詞(分詞)」が上記の3つの意味をもっているとは限らない。

(3) 「catch[take等]+A(人)+by+the+体の部分:Aの〇〇をつかむ」型

(ex) He caught me by the arm. 彼は私の腕をつかんだ

上の英文に対して、「2つある腕のうちの1つをつかんだのだから an arm とか one of his arms というべきではないか」と一見日本人は思ってしまうがちだ。しかしそのように言うと、かえって「片腕」を強調しすぎる表現となってしまう不自然なのである。これはどちらの腕をつかんだかを問題にしているのではなく、身体の一部のうち(たとえば頭でも脚でもなく)腕をとらえた、つかんだということで「限定・特定」を意味する the がついているのである。以下に同じタイプの例文を挙げてみよう。

(ex) She seized the child by the collar.

彼女は子供のえりをつかんだ

He shook her roughly by the shoulder.

彼は乱暴に彼女の肩をゆすった

He kissed the girl on the forehead.

彼はその女の子のひたいにキスした

He patted me on the back.

(注意を引いたり、慰めるために)彼は私の背を軽くたたいた

(4) 「by+the+A(単位を表す名詞):~単位で」

(ex) We buy tea by the pound.

私たちはポンド単位でお茶を買う

The workers are paid by the week.

その労働者たちは週給をもらっている

(5) 「the+(単数の)普通名詞」が抽象名詞化することがある

(ex) The pen is mightier than the sword.

文筆(ペン)の力は武力より強い

會文語的な表現で、諺など比較的限られた表現に見られる。

(6)定冠詞のつく固有名詞

河川・海洋 : the Thames, the Sea of Japan, the Pacific

山脈 : the Alps, the Rockies, the Himalayas

群島 : the Philippines, the Marianas

海峡・半島 : the English Channel, the Izu Peninsula

運河 : the Suez Canal, the Panama Canal

砂漠 : the Sahara (Desert)

船舶 : the Mayflower, the Titanic

官公庁 : the Ministry of Foreign Affairs

博物館・図書館・劇場等 : the British Museum, the Hibiya Library
the Globe Theater, the Eiffel Tower

(7)the のつかない固有名詞

會一般に国名、大陸、州、県、都市、山、湖、島、岬、公園、広場、駅、橋、学校、教会、城、天体などには the をつけないのがふつう。

(ex) Japan, Europe, California, Niigata Prefecture,
Mount Fuji, Lake Biwa, Sado Island, Cape Horn,
Hibiya Park, Ueno Station, London Bridge,
Juilliard School of Music, Westminster Abbey,
Warwick Castle, Venus

會「〇〇大陸」という場合には the がつく。

(ex) the Eurasian Continent(ユーラシア大陸)
the Antarctic Continent(南極大陸)
the Asiatic continent(アジア大陸)

會国名でも「〇〇連邦」「〇〇共和国」「〇〇帝国」という場合には the がつく。

(ex) the Soviet Union(ソ連)、the Republic of Korea(大韓民国)
the Roman Empire(ローマ帝国)

「アメリカ合衆国」も以下のように表す。

the United States (of America)

the U.S.

the U.S.A.

「イギリス」は以下のように表す。

the United Kingdom

the U.K.

※正式名称は the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland。

(8)「新聞」「雑誌」には the がつく

(ex) The Times タイムズ紙

The Economist エコノミスト誌

(9)「団体名」にも the がつく

(ex) the Republican Party 共和党

the Liberal Democratic Party 自由民主党

(10)必ず the をつける地名の区別の仕方

地名について the がつくものとしては以下のようなものがある。

ocean, sea, river, canal, isthmus, peninsula, gulf, shore,
beach等

※river 等の場合 a river ということもある。

(ex) You can see the Indian Ocean from here.

ここからインド洋が見える

逆に the をつけなくても用いられるものとして以下のようなものがある。

street, avenue, square, pond, bridge, mount, cape, lake,
island, bay, park等

※もちろん「特定の street」といった場合には the street と the がつく。

両グループの違いは、the をつけるグループは、はっきりした境界が

ないのに対して、the をつけなくてもいいグループは、境界がはっきりしている点。境界がはっきりしないものには the をつけることによって、そのものを明示し他と区別する(人間の感覚では境界を認識しにくいものには the をつけてそのものを特定する)のである。逆に言えば、おのずから境界がはっきりしているものには the はあえて必要ないということ。